

文化と芸術についての対話

新日本出版社

蔵原 惟人(くらはら これひと)

1902年生まれ

日本共産党 中央委員会 常任幹部会委員、知識人・文化・教育委員会責任者、日本共産党中央委員会付属 社会科学研究所所長。

主な著書 『蔵原惟人評論集』全七巻『マルクス・レーニン主義の文化論』『若きレーニン』一・二『思想としての民主主義』『文学への思索』『渡辺崋山』以上いずれも新日本出版社刊。

『現代民主主義と日本の文化』『レーニン文化・文学・芸術論』(共訳編)『共産主義と文化』以上大月書店刊。

文化と芸術についての対話

1974年8月30日 初版

著者 蔵原惟人
発行者 松宮龍起

郵便番号 102 東京都千代田区富士見2-13-14

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京(265) 7006 (営業)
(265) 2075 (編集)

振替番号 東京 13681

印刷 光陽印刷株式会社 製本 古賀製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします

文化と芸術についての対話
目次

I

ベトナムの文化・日本の文化

〈対談者〉ハ・スウォン・チュウン……7

日本の古代文化をめぐって

〈対談者〉田中一松……37

沖縄の文化を語る

〈対談者〉伊波広定……83

現代の教養について

〈対談者〉古在由重……93

II

文学者と政治活動

〈対談者〉平野謙……123

日本の近代文化・文学を考える

〈対談者〉阿部知二……165

「ナップ」結成四十五周年

〈対談者〉 佐藤 静夫……………185

文化運動の新しい課題と歴史的教訓

〈聞き手〉「赤旗」記者……………217

Ⅲ

レーニンについて

〈対談者〉 江口 朴郎……………231

キリスト者との対話

〈対談者〉 田中英吉……………277

知識人と自由

〈座談会〉 芝田進午・永井 潔……………293
山下文男・蔵原惟人……………

カバー写真

「染付葡萄栗鼠文皿」古伊万里
（小学館『原色日本の美術』より）

I

ベトナムの文化・日本の文化

〈対談〉

ハ・スウオン・チュウン
(ベトナムの作家)

蔵原惟人

蔵原 連日、おつかれで大変でしょう。きょうは主として文化問題を中心に、お話をねがいます。

一ヵ月近く、日本に滞在されて、いろいろなところを見て歩かれたと思うんです。さっき、代表団が訪問されたところのリストを見せてもらったんですけど、かなりいろいろなところ、なかには私の知らないところ、行ったことのないところまであります。まずその印象、日本の文化、風俗、習慣の印象からお話しねがえれば、好都合です。

チュウン 日本の文化、風俗、習慣の印象といわれましたが、日本のみなさんが私たち代表団にたいして行く先ぎきであたたかい歓迎をしてくださいました。まずはじめにこのことについてすこしのべきせていただいでよろしゅうございましょうか。

蔵原 ええ、どうぞ。

チュウン 日本でのだいたいのスケジュールが終わり、あと一日、二日で帰国するわけですが、まだまとめができていませんので、これからお話しすることはまだ系統だっておりませんが……。

蔵原 どうぞ自由に話してください。

チュウン 私たちが各地を歩きました感じましたことは、日本の労働者、知識人など日本人が、私

たちベトナム人民のたたかいにひじょうに深い関心をもっていることです。どこへ行っても、熱気ある歓迎で両国人民の戦闘的連帯が強調されました。

ベトナム民主共和国政府の立場、南ベトナム解放民族戦線の政治綱領をすべての人びとが支持してくれました。

ちょうどいま、パリでアメリカとの会談が行なわれています。これについて、各国の言論機関が「平和」についていろいろとりざたしているにもかかわらず、日本のみなさんがたは、アメリカ帝国土義のほんとうの姿を正しくあばきだし、私たちのたたかいを支持してくださっているところにとっても感動しました。

とくに私がふかい感銘をうけましたのは、ちょうどホー・チ・ミン主席の誕生日——そのとき名古屋にいました——そしてその翌日、東京においても、私たちは敬愛するホー・チ・ミン主席の誕生日をお祝いし、健康を祝福するさまざまのことばに接したことです。

また行ったさきざきの人たちが、ベトナムにおけるメーデーの写真を私たちにみせて、ホー・チ・ミン主席、レ・ズアン第一書記、あるいはファン・パン・ドン首相が、みんな元気でうつっていることを話してくれました。西欧側の通信によって、ホー・チ・ミン主席は健康を害しているということが流されたりしているなかで、日本のみなさんが私たちの敬愛するホー・チ・ミン主席に、ふかい関心をよせてくださるということに、たいへん感激いたしました。

第二には、私たちがじっさいに日本の各地を歩いてみまして、日本の労働者、知識人、婦人、青

年のみなさんがたの独立、民主主義を守り自由をかちとるたたかいが、私たちベトナム人民の、アメリカ帝国主義の侵略に反対するたたかいと深く結びついているということがよくわかりました。

そして、この日本人のたたかいが断固としてしかも幅ひろく行なわれていることに感激しました。たとえば宗教家のみなさん、このなかに仏教関係の方もおれば、キリスト教の信者——古いプロテスタントやカソリックの方がたなどじつにさまざまな宗教関係の方がたが、ふくまれていました。これら多くの人たちが私たちがたたかいを支持し、そしてアメリカの非人道的な戦争を非難しました。

これらの平和・民主勢力のたたかいはまだ日本の全土にわたっておおっているとは思いませんが、しかし、いま、なものにも阻止できない力で前進していることを強く感じました。

そしてこれらの積極面は日本共産党が正しい路線をもっているということであらわしていると思えます。

文化遺産の保存について

チュウウン つぎに、風俗、習慣、文化の面についての印象を申し上げます。

私たちは、歴史的な遺産をいくつか見せていただきました。現存する日本のお城でも、もつとも古いといわれる愛知県の犬山城を見ました。残念なことには、日本でいちばん古い都だといわれて

いる奈良は紹介をうけただけで、見ることはできませんでしたが、しかし京都は見学いたしました。そのほか、今から七百年ほど前にたたかいた博多の元寇の防塁といったものも見せてもらいました。

これらの史蹟はもちろん、封建時代のものです。しかしそれらをきずきあげたのは勤労人民であります。建築面からみますとひじょうに勇壮な建築だと思えます。

私を感じましたのは、ひじょうに日本の民族性があらわれていて、質素といえますか、かんたんなつくりで、いろんな装飾がほどこされていけないことです。門のかたち、屋根のそりぐあい、あるいは部屋の装飾などすべてかんたんにできています。しかし一部の建築物とかその装飾とかは、だいぶ中国の影響をうけているように見受けました。

私たちの国でもある時期においてはそういう外国の影響をうけたものがたくさんありました。これは歴史のなかでは当然なことだと思えます。

蔵原 日光には行かれましたか。

チユウン いや、行きませんでした。私たちは、日本のいろんな建築物が好きですけれど、とくに私が好きになったのは柱でした。

蔵原 ほほう。

チユウン とくに茶室の柱。自然そのままの柱を使って手を加えないというのは、ひじょうに好きです。

もう一つ、日本の民族性をあらわしていると感じましたのは、部屋のつくりですね。自然のものがさりげなくおいてあるというところが、私はひじょうにいいと思います。

元寇の防塁を見ましたが、現在残っているのはほんの一部でしかないそうですね。歴史を研究しているかたに聞きますと、ひじょうに勇壮な防塁を築いた。十三世紀においてすでにあれだけの長い、そして高い、幅のあるものを築いたということは、その当時からすでに、日本にすぐれた技術があったことをはっきり証明していると思います。

同じ時期にやはり、ベトナムにも元軍が来襲したんです。それを防ぐためにチャン・フン・ダオという人が、バクダンという川に大きな丸太でクイをうちこんで、防塁にしました。流れの早い川底に、それだけ大きな丸太のクイをうちこむということは当時としてはそうとうな技術を要したと思います。

蔵原 モンゴル、その当時の元の来襲を東方で阻止したのは、ベトナムと日本とインドネシアのジャワなんですよね。それがそれぞれがった方法で防いでるのは、ひじょうにおもしろいと思うんですよ。インドネシアのジャワではいつわって降伏して、奥地に元軍をひきいれて、それで滅ぼしたということ聞いてます。日本はいろいろと防衛はしましたが、台風がふいてきて、それがさいわいして水ぎわで撃退しました。ベトナムはいまお話があったように、川の中に大きなクイを打ちこんで防ぎましたが、日本などと違って地続きですからね、たいへんだったと思います。

チュウン 私たちの国ではバクダン川にうちこんだクイはいまでも保存してあります。ベトナムにい

らっしゃったとき、そのクイ、ごらんになりましたか。

蔵原 ええ見ました。

チュウワン 九州に行ったとき、地方の歴史家の方がたからあその川のなかに、日本でもクイをうちこんだということを書きました。しかし現在はまだ、そのクイが見つからない、保存されていないということを書きました。こういう面から見ましてむかしの歴史的な遺跡、ことに大衆が立ちあがってたたかったときの遺品、遺跡が日本では十分に保存されていないのではないかという感じがしました。

多くの歴史家、研究家のかたたちが話してくれましたが、以前は遺跡はたくさん残っていた。しかし資本主義が発展していく過程で、資本家がそういうものに関心をもたず、道路をつくったり、工場をつくったりして、みんな、それを破壊してしまった。一部でそれを保存しようという運動をやっていますが、ひじょうに困難であるということを書きました。また一部の封建支配者の遺跡の保存はされていますけれど、たとえば京都御所のように一般大衆が、常時見ることができないという保存の方法もやっていますね。

蔵原 日本には先史時代、歴史時代の遺跡がたくさんあって、その多くがまだ埋没されています。ところが、最近、道路建設、宅地造成、観光開発などで、何千年も地下に眠っていた遺跡が、急速に破壊されています。毎日、日本のどこかで、一つぐらいつつの遺跡がブルドーザーの下で壊されているといわれます。「古都保存法」などによる政府の「保護」はまったく名目だけで、それをきめ

るのが建設省だというのは、この法律が文化保存の観点にたっていないことを示しています。私たちはそれらの遺跡を破壊から守る運動をやっています。破壊するのは独占資本で、守るのは共産党と民主勢力、それに進歩的な学者、文化人です。寺社などの建造物の保護も観光の観点から主として問題にされているので、観光ルートにのらないところのものは荒れるにまかされています。

チュウン 各地でいろんなお寺とか、神社も見てきました。

そのなかで、仏像をのぞいて、石像とか、銅像とかそういうものがひじょうにすくないというところを感じたんです。中国やベトナムでは神社などに行くことと参道の両側に動物の石像がたくさんありますが、今回日本で見た範囲ではそういうものは見受けませんでした。いま申し上げましたのは、封建時代から残っている民族の文化遺跡といったものについての印象なんです、ここでひとつ考えてみる必要がありますのは、日本の封建時代の歴史と、ベトナムにおける封建時代の歴史はだいぶんちがうんじやないか、それが文化遺跡にもあらわれているんではないかということです。この点については、わたしもまだ十分研究したわけではありませんが、ベトナムは常時外国からの侵略を受けた。ですから、歴代の王朝、朝廷は、外国の侵略者とたたかうために農民と団結したということがしばしばあったんです。そういう歴史のなかで、民族的な英雄というのは、たくさんいるわけですけど、それらの人びとのなかには、農民から出て支配階級になり、そして外国の侵略とたたかいで、民族的な英雄となったという例もあります。たとえばチャン・フン・ダウ、レー・ロイ、ゲン・チャイといった人たちはそういう例なんです。